



# きらつと教育

晩年を迎えたあるシスターは余暇を利用して随筆を書き始めました。過去を追憶しながら、あるいは、日頃から考えていることなどを気の向くままに書き留めた文章の中に「きらつと光る」教育的な示唆があります。

8回シリーズの第7回目です。どうぞ、お楽しみください。

## 7 犬猫預かり保育

30年前、私は中学・高等学校に勤務していた。

私が動物愛護者であることを誰からか聞いたのであろう。

登校中、よく子猫を鞆にいれて、職員室にいる私に、手招きをする生徒との関係、他の先生に見つからないように、いつもそっと倉庫にかくまってあげていた。

ある日、家庭科の先生が、「聞いてください」と高校2年生の学年主任をしていた私のところに詰め寄ってきた。「実は出席を取っていたら、欠席者の机から猫の耳が見えたので、行ってみたら、猫が寝ていたのです。困ります。」と言った。

おそらく、預ける時間がなくて、そのまま欠席者の椅子に寝かしたのだでしょうと思った。

それを耳にした数学の男子の先生が、「いや、猫が眠っていると起こさないようにとの心遣いで静かに聞いてくれるので、授業がやり易いのです。僕の時間は幸いです。」二人の先生のやり取りに、他の先生は黙って笑っていた。

ある父兄会の日、「先生ありがとうございます。うちの子が猫を持ってきたお陰で、家の雰囲気のがらりと変わり、話題が広がり、明るくなったのです。」…「お子さんが、ご家庭に聞かないで持って帰ったので、ご迷惑をおかけしたのではないかと心配いたしました。」…「とくに夕食の時、今まではお互いに話題に乏しく、主人は黙って新聞を読み、子供たちは、さっさと食べていってしまう状態でした。主人は猫を膝の上に乗せて新聞を読み、私はほっとしています。」

私は心の中で、預かり動物保育も馬鹿にしたものではなく、職員から余りよく思われなかったが、動物を通して生徒と私との関係は最高によく、楽しませてくれるありがたい存在だと思う。

10年間の教師生活の楽しかった思い出の一つである。

(シスターK.M.)